

難関国公立大国語／難関大国語 T

京大国語／難関大国語 T (京大)

一橋大国語／難関大国語 T (一橋大)



出典：和辻哲郎『風土』／京都大学 後期日程 01年

文章略解

ヨーロッパでは、私室の外はすべて公共空間であった。そのために個々の建物単位ではなく、城壁や国境に囲まれた部分の中の人々が共同の敵に相對するという経験の中で、人々が社会的な義務の自覚を育んだ。これに対し日本では、建物の内外を截然と區別することと相まって「家」の意識が強く、逆に個人の意識は弱かった。その「家」内部で相互に繊細な感情を交わしあうことが、外部にある共同体への嫌悪を生むこととなったのである。

解答

問1 ヨーロッパの都市にある建物の内部の廊下は、個人的な空間の外にあるものだから、多数の人々が自由に行き来する共同の通路としての意味合いを持っているものだとということ。〔80字〕

問2 ヨーロッパの都市においては、個人の私室の外はすべて共同空間であり、その両者の中間的な単位としての「家屋」に対する意識が薄いため、人々も人間関係の単位としての「家族」を強くは意識しない(2a)。これに対し日本においては、建物の内外が截然と區別されているために個人と社会の隔てを象徴する「家屋」を強く意識し、人間関係でも「家族」の内外を隔てる意識が強くはたらいっているということ(2b)。〔183字〕

問3 ヨーロッパの城壁都市の中で、町の中の人々が外部の共同の敵に対して団結して戦う必要性に迫られ、その共同を守らないと自

らの生命も危ういという切実な状況下において、個人の権利と共同の利害との関連を強く意識する経験によって義務の自覚が生じる。**〔117字〕**

問4 ヨーロッパにおいては、個々の建物単位ではなく、城壁や国境に囲まれた部分の中の人々が共同の敵に相對するという経験の中

で、人々が社会的な義務の自覚を育んだ。この意味で、「へだて」は個人意識と義務という社会的な関係において強く意識されている。これに対して、日本においては、建物の内外を截然と区別することと相まって「家」の内外における「へだて」の意識が強く、その中で個人の意識は弱くなっている。そのため、「家」内部において相互に繊細な感情を交わしあうことが、その裏返しとして「家」外部に対する非社交的な態度を生み、「家」を超えた共同体への嫌悪を生むこととなった。**〔277字〕**

出典：杉本良夫『日本文化という神話』／横浜市立大学 国際文化学部 98年

文章略解

多くの日本文化論は、まず「日本的」なものが存在するという前提に立ち、その特性を持った人を限定的に「日本人」と見なすという縮小主義の方向をとる。これに対して日本人の定義をリベラルな方向に向かわせる多様主義は、日本文化の中にさまざまな階層文化が存在するというマルチカルチュラリズムを志向する。多文化主義的アプローチは、個々の階層文化の分析の後に、それらに共通な「日本的」なものを問う帰納主義的手法である。

解答

問1 まず「日本的」なものが存在し、そのような特性を習得した人たちを「日本人」と見なす手法〔42字〕(2～3行目)

問2 大和撫子

問3 所属する企業のために粉骨砕身する猛烈社員こそが純粋な日本人であるという前提に立ち、その企業のすべての社員に対して猛烈社員になることを要求すること。〔73字・解答例〕

問4 上位文化としての国民文化のあり方が不明なままでは、下位文化としての階層文化の内容も不明確になるから。〔50字・解答例〕

問5 単一

問6 多文化主義を帰納主義的と捉え、個々の階層文化の分析の共通項として日本文化を明確にすべきだとする立場。〔50字・解答例〕

問1 指示語の指示内容に関する問題に際しては、傍線部分の語句の持っている性質（この場合なら「方法」）に近い内容の語句を問題文中に求めていけばいい。ここでは、前行の「手法」という語がそれにあたる。ここを軸にして、字数制限（五十文字以内）に合わせる形で文中の表現を抜き出せばよい。

問2 設問の指示において「文中の語」とされていない以上、この部分の前後関係から自分で適切な語を推測していくしかない。

直前の「『大和魂』を持った日本男児」とこの「**A**」として振る舞う日本女性」とが対になっていることから、この空欄に入れるべき語の推測ができれば、①「大和……」という語であること、②「日本女性」の「振る舞い」のあるべき姿に関するものであること、という二つの要件が抽出できれば、「大和撫子」を思いつくことはさほど困難ではあるまい。

問3 「猛烈社員」（モーレッツ社員）とは、日本が高度経済成長にあった時期に流行語となったものである。この時期の当事者でなくとも、語感から意味の類推はつくだろう。「社員」（つまりは会社に所属する人間）として「猛烈」であること、つまりは所属する会社のためにとにかく猛烈に働く社員のことを意味する。これを例とせよ、という設問の指示に従うなら、ここで言う「純粋日本国民文化」とは、「猛烈社員」であることこそ「純粋日本人」であることとみなすことになる。まずはこの点の関連づけがほしい。

これができれば、傍線部分後半の「それへの同化主義を奨励する傾向」ということの説明もその延長線上で書けよう。要は、日本人のすべてに「猛烈社員」であることを奨励する、ということである。この点の指摘もほしい。当然のことながら、その裏返しとして「猛烈社員」以外の人（自分の趣味や余暇を大切にする人など）は排除されることになるのだが、制限字数ではそこまで触れている余裕はない。

問4 傍線部分に言う「この用語」とは、「階層文化」（19行目ほか）を指す。この「階層文化」がいかなる意味で「危険」なのか、を説明することがここでの作業課題であろう。

「階層文化」についての問題文中の記述を追っていくと、これは実質的には「サブカルチャー」⇔「下位文化」（20行目）だとされている。この「下位文化」は「上位文化の総体が不明であり、何が国民文化であるかが未決である」と「危険だ」というのが傍

線部分の趣旨である。

ではその「上位文化」＝「国民文化」と「下位文化」との関係はどのようなものか。問題文の記述をさらに遡っていくことで手がかりは見出せる。多文化主義における「階層文化」とは、「さまざまな階層文化が共存する場所としての日本社会のビジョンを描き、日本文化を複数名詞と見なす」（16行目）というものである。この記述と、「危険がつきまとう」ということとの関連を考え ていくと、「日本社会」の全体的なビジョンが不明確なままに、サブカルチャー的な「下位文化」に属するものを闇雲に拾い集めても、それでは何が「下位文化」なのかがわからなくなってしまいう危険性がある……という主張が浮かび上がってこよう。この旨の指摘があれば、おそらくは出題の要求を満たしたものにならう。

問5 空欄を含む部分が「多文化主義」との対比における「同化主義」の説明で述べられているものであること、そして「**B** モデル」という言い方がひとまとまりの語句になっていることなどから、ここに入れるべき「漢字二字の語」を推測していくことになる。

「同化主義」とは、傍線2にもあるように、ある「単一文化を前提とし」たものである（問3の解説も併せて参照。「猛烈社員」（モーレッツ社員）を例とせよ、という設問の指示に従うなら、ここで言う「純粹日本国民文化」とは、「猛烈社員」であることこそ「純粹日本人」であるとみなすことになる）。このことと、「多文化主義」との対比がなされている文脈を考えあわせれば、「単一」という漢字二字を導くことができよう。「限定」も意味的に近いが、「限定モデル」という語句は「単一モデル」に比べてなじみが薄い。したがって妥当性が低い。

問6 設問の趣旨に沿って、「多文化主義」についての筆者（杉本）の依拠する立場を追っていく。最終段落において「多文化的帰納主義の立場から考えれば……推定されるべきなのである」（36～38行目）と述べられている点に注目できれば、解答の核はできる。この問題文中で筆者が「……べきである」というふうな形で、自らの立場を露わにしている箇所が他にないことに注意したい。この一文を軸に解答をまとめるなら、①「多文化主義」は「帰納主義的である」こと（34～35行目）、②したがって「個々の階層文化の分析」の積み重ねの上に「その総和ないし共通項として」国民文化というものが「推定される」ということ（37行目）、の二点がポイントとならう。設問の指示に「日本文化論における」とあるところに合わせて、②の「国民文化」は日本のものであると

の限定も必要であろう。

以上二点の踏まえられた解答ならば、おそらくは出題の要求を満たしたものとなろう。

出典：大岡信『かな書きの詩人たち』／一橋大学 98年

文章略解

上田秋成は、友人・与謝蕪村への追悼句の中で彼を「かな書きの詩人」と評した。この「詩人」とは漢詩人のことである。この定義は、日本の詩を考える上で重要な点を突いている。蕪村が漢詩の重要性を説いたのは、享保時代の俳諧大衆化が、卑俗化に通じることへの懸念によるものだった。その姿勢は芭蕉にも通底している。このように日本の詩は、漢語・漢詩文という異質なものとせめぎ合いによって、本来の姿に戻ることができたのである。

現代語訳

「その句々の……」〔4～10行目〕

その〔＝与謝蕪村の〕数々の俳諧の端正な詩句の様子といたら、その〔＝蕪村の〕文章の洒脱な様子であるのとは相似ていないものであって、（発句を）詠むとただ漢詩を女文字〔＝仮名〕で書き付けたような（句様をしている）のは、昔、蕉窓〔＝芭蕉庵〕に座り屈まって、杜甫の詩を上手に詠みなし、笠をかぶって草鞋を履きながら、『山家集』を懐にして（旅をして）いた人〔＝松尾芭蕉〕が一貫し（て説い）た教えであるにちがいない。王母の鍋を「霰のうつ」と言い表し、牡丹を「天の一方に」と言い表したのはその〔＝芭蕉の〕語勢を真似して表出したものであるよ。（中略）これは仮名の漢詩と言っているのではないか、と時々他の人たちとも語り合っていた。今、（蕪村は）老衰して（生涯の）終わりまでも立派に全うなされたことを羨ましく思い、かつその端正な詩句を惜しみつつも

「かな書の……」〔14行目〕

かな書きの漢詩人が西に向かって（中国へ、そして浄土へと帰って）いったよ。東風が吹いて

「自然に化し……」『春泥句集』序〔20行目〕

（人間が）自然の中に融和して俗世を離れるのにてっとり早い方法はありませんか

「あり、詩を……」『春泥句集』序〔20～21行目〕

あります。漢詩に親しむのが（自然に融和して俗世を離れるためには）適切（な方法）です。あなたはもともと漢詩を上手に作るができます。その他（の手段）に（俗世を離れる方法を）求めてはなりません

「石に詩を……」〔26行目〕

石の上に漢詩を書き付けて（人生を）過ごしていく枯野（「人生の黄昏」）なのだなあ

「林間に酒を……」『和漢朗詠集』秋興〔28行目〕

林の中で酒を温めるために落ち葉を焚く 石の上で漢詩を書き記すために緑色の苔をかきのける

「李杜が心酒を……」〔33行目〕

李白や杜甫の心の酒（「心情のエッセンス」）を味わい、（名僧かつ詩人である）寒山がすすったような（質素な朝食用の）粥をすすする（「仏法の教えに帰依する」）

「白氏が歌を……」『虚栗』跋文〔33～34行目〕

白楽天の漢詩を仮名に翻案し、（俳諧の）初心者を（卑俗化から）救う手段にしようとしている

解答

問1 口

問2 あなたはもともと漢詩を上手に作ることができる

問3 俳諧が卑俗化し、初心者が純正な用語を得ることの困難な状態。〔29字・解答例〕

問4

日本語が漢語を大胆にとり入れることで卑俗化から脱し、日本語本来の洗練された美と力とを回復すること。
〔49字・解答例〕

文章略解

安永九年に与謝蕪村が巻いた二つの歌仙と、それによせた自序は、たいへんしゃれたものである。「花守」の句によって、自分は正風の単なる後見であってそれを継ぐ器量はとてないと示し、一方「桃李」を「ももすもも」と読み替えることによって、陶淵明の詩観を端的に和様に翻案して示した。これは芭蕉と淵明の双方に対して同行者としての挨拶を送りつつ、彼ならではの「日本」の自覚を示したものであると解されよう。

現代語訳

「いつのほど……」

いつ頃のことであっただろうか、四季（それぞれを詠んだ）四巻の歌仙があった。（そのうち）春（と）秋（の巻）はなくなつてしまい、夏（と）冬（の巻）は残った。ある人が（この歌仙を）求めて、（それぞれの句を）木に彫ろうと言ったところ、（別の）ある人が制して言うことには「この歌仙はできてからかなりの歳月を経ている。おそらくは（当世の）流行に遅れているであろう」（と）。私が笑って言ったのは「そもそも俳諧が闊達であるということには、本当に流行があ（るようであ）って実際は流行がない（ものである）。喩えるならば、一つの丸い建物に沿って、人を追いかけて走るようなものである。先んじていた人が、かえって（逆に）遅れた人を追いかけるのに似ている（ものである）。流行の、先んじているか遅れているかは何によって判別することができようか（いや、確かな判別基準などないのだ）。ただその日その日ごとに、自分の胸に思ったことを（句として）うつしだして、今日のは今日の俳諧で、明日のはまた明日の俳諧なのである。（この歌仙を）題して「ももすもも」と言い、（その意は）めぐり詠んでもはてがない（ということである）。これがこの句集の大意である。

解答

問1 ア||4 イ||3 ウ||2

問2 A||1・4 B||2・4

問3 4

問4 片や芭蕉の「枯野」の死に対する、片や淵明の自然観に対する同行者からの挨拶。〔37字・解答例〕

解説

問1 語句の意味に関する問題。いずれも慣用句的に用いられる表現である。こうした語句（故事成語・諺・四字熟語など）は日常生活に比べて入試での使用頻度が高い。入試本番までに頻出のものの意味・用法をひととおり確認しておくことよい。試験問題に際して、記憶があやふやな場合には、熟語を想起するなど、既得の知識を応用して対処していくとよい。

アに関しては「襲名」「踏襲」などの熟語における「襲」の用例を想起すれば、「前の人と同じようにやる・受け継ぐ」の意味であるとわかる。その意味に相当する選択肢は4のみ。イは「謙」の字から「謙遜」「謙讓」を導ければ、「慎ましいこと」のニュアンスを含む3が選べる。ウは慣用句。「膾炙」とはもともと「膾（なます）」と「炙（あぶり肉）」のこと。それが転じて「多くの人の口に合う」——「多くの人が好んで口にする」の意味になったものである。

問2 選択肢に挙げられているのはいずれも有名な句である。この大学では、この程度の知識を持っているのが「受験生」としては当然のこと」とされているわけだ。

Aの中で蕪村の句は1・4（「蕪村句集」）。2の句の作者は松尾芭蕉（「おくのほそ道」）、3の句の作者は小林一茶。Bの中で芭蕉の句は2・4（「おくのほそ道」）。1は正岡子規、3は与謝蕪村の句。松尾芭蕉（一六四四—一九四）・与謝蕪村（一七一六—一八三）・小林一茶（一七六三—一八二七）に関する事項は頻出。それぞれの作風と代表的な句については整理しておいた方がよか

ろう。

問3 選択肢がいずれも「この」という指示語（連体詞）で始まっていることに注目し、空欄の前の内容を追っていく。ここでは「余の風雅は夏爐冬扇のごとし」「文台引下ろせば則反古」（14行目）とあるところがヒントになる。「夏爐冬扇」とは、夏の爐と冬の扇、つまりは季節はずれで役に立たないものの喩えである。また、「反古（ほうぐ）」とはチリ紙のこと。要するに双方ともに「役に立たないもの」「必要のないもの」ということである。このニュアンスを汲んでいる選択肢は4の「無用者」。1の「出家者」では少々はずれる。3の「俳諧師」では「役に立たない」につながらない。2の「雅やかさ」という積極的な評価はこの文脈にあわない。

問4 「文中の別の表現を使って」という指示に注意。こうした指示の場合、問題文中のどこの表現を元にして解答を作るか、という「部分の選択」から採点基準に入っていると考えた方がよい。だから、自分で記述の解答を作ってそれに文中の語句を当てはめていくよりは、逆に文中の表現から「傍線部①と同様のこと」を言っている部分を探し、そこをベースにして「四〇字以内」にまとめていく方が、作業としてはスムーズに進む。

傍線部分の意味は、蕪村の記した「桃李序」が、一方で芭蕉の「往きて帰らぬ詩心」に、他方で「淵明の怡然自樂の自然観」につながるものである……ということ。だとすれば、傍線部分以外の問題文中に、「蕪村」が「芭蕉」と「淵明」の双方とつながりを持っている部分を探していく。「蕪村」「芭蕉」「淵明」が集約的に現れるのは、問題文中では「蕪村の『めぐりよめどもはしなし』は、片や芭蕉の『枯野』の死に対する、片や淵明の自然観に対するみごとな同行者の挨拶であろう」（35～36行目）の部分である。ここを使って制限字数内に収めればよい。

【問題】（演習）

出典：広重徹『近代科学再考』／一橋大学 01年

文章略解

解答に同じ。

解答

近代科学は要素論的であるがゆえに工業化社会の要求する個別的な問題に対して有効に機能してきた。しかしまたそれゆえにこそ、今日我々が直面している全体性に関わる問題に対しては無力であり、近代科学には問題解決が期待できない。今求められるのは、近代科学に成し得るのが部分的認識でしかないことを十分に自覚したうえで、近代科学の要素論の枠組みを越え、専門の枠の外に向かって開かれた科学を確立することである。〔196字〕

文章略解

解答に同じ。

解答

我々が生活している世界は環境と呼ばれる。人間と環境は相互に働きかけ合うものだから、人間が環境に働きかけることは同時に自己に働きかけることであり、そうすることで人間は自己を形成し、自律的な存在となる。現実的存在である人間は環境の中であって、そこにある他の無数のものと関係性を持つ。この主観(人間)と客観(環境)は作用を通じて相関的であるが、しかしながら全く別物であり、その意味では対立的でもある。〔197字〕

要約とは何か？

要約とは本文という「オリジナル」の「縮小コピー」を作成する作業である。

では、「正しい」縮小コピーとはどのようなものか？

それはオリジナルが持つボディバランスを破壊することなく、精確均質な縮尺でもって圧縮したものである。

「日本地図」を例にとると分かりやすい。例えば東京に住む小学生に日本地図を描かせたとする。恐らく関東地方ばかりがやたらと精緻な地図を描き、その他の地方の海岸線・半島などはなおざりにするのではないか。同様に、大阪の小学生は近畿地方ばかり不自然に詳しく描くであろう。

自分が理解していることばかりを差別的にズームアップし、その他は遠景として彼方に追いやる。これでは「正しい」縮小コピーとは言えない。

また、北海道を完全にカットして「これが日本です」と言ったらどうであろうか？北海道民は顔を真っ赤にして怒るに違いない。九州でも同様であろう。本州をカットした日には、それが日本地図であることすら誰にも分からないであろう。

つまり要約とは、

○本文中に存する複数の主要論点を全て拾い上げ、

○それらを平等なスケールの下に圧縮してやる

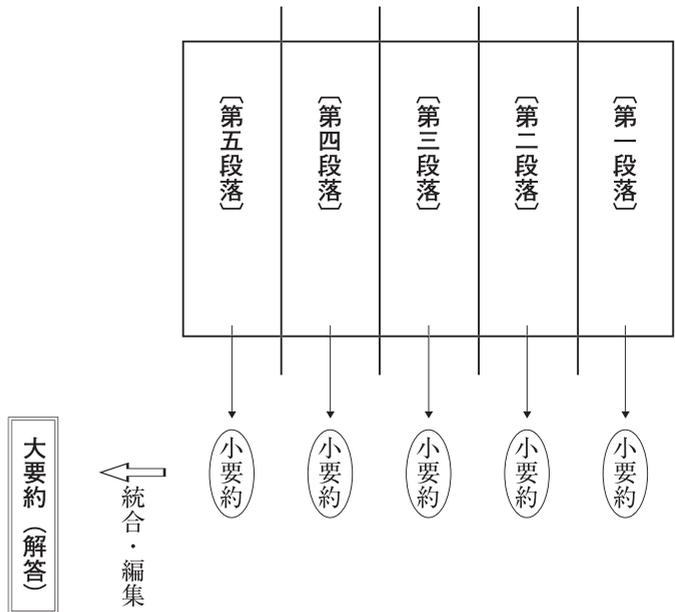
作業なのである。

では、本文中に散りばめられた複数の論点を過不足なく拾い上げるにはどうしたらよいか。

形式段落に着目してはどうだろう。

形式段落とは、それで一つのまとまりを形成しているから形式段落になっているのであり、逆に言えば、一つの形式段落に四つも五つも六つも論点が存在することはまずない。一つ、多くても二つ程度の論点がそこには存在し、それがそれなりの決着を見たからこそ次の段落に移るわけである。

よって、私は次のような作業をお薦めする。



数千字もある本文をいきなり要約しようとするから、目鼻立ちのはっきりしないピンボケした解答になってしまう。だが各形式段落を「各個撃破」的に要約するのであれば、諸君ほどの能力があれば容易いことだろう。なにせ各形式段落にはせいぜい一つか二つ程度の論点しか存在しないのだから。まずは各形式段落の要約（＝「小要約」）を抽出し、それらを最終的に「大要約」（＝解答）へと統合すればよい。字数調整はそのあと考える。

ただし、「小要約」を単純に並べれば即座に「大要約」が完成するような易問は多くない。であるから、その際要される「編集作業」が諸君の腕の見せ所となる。編集作業の方法論は幾つかあるが、ここでは割愛する。

さて本問であるが、実はただの要約ではない。「作者は人間と環境との関係をどのように考えているのか。その点が明らかになるよ

うに」とある。「条件付き要約」だ。すなわち、この点に関してはズームアップ、つまり他の話題よりもやや重きを置いて書いてやる必要がある。要するに、他の話題よりも多少「ヒイキ」してあげなさい、ということだ。この点は後述する。

第一段落

本文に補助線を引いたものを示せば、次のようになろうか（以降これを「分析図」と呼ぶ）。

〔図1〕

〔現実〕というとき、まず考えられるのは「我々の生活」である。この〔現実〕を顧みて知られることは、「我々が世界の中で生活しているということ」である。我々がそこにいて、そこで働くこの世界は、「環境」と呼ばれている。環境というと普通にまず①自然が考えられるが、自然のみでなく、②社会もまた我々の環境である。〈むしろ〉我々がそこにある世界②は、世の中あるいは世間である。「世界」という言葉はもと①自然的対象界でなく、②人間の世界を意味した。「環境」は〈我々に近いものであるとすれば〉、人間にとって人間よりも近いものではなく、「環境」は〈我々に遠いものであるとすれば〉、人間にとって人間より遠いものはない。

〔現実〕というとき、まず考えられるのは「我々の生活」である。

この〔現実〕を顧みて知られることは、「我々が世界の中で生活しているということ」である。

← 環境と呼ばれている。

① 自然（自然的対象界）

② 社会（人間の世界）

レポート

筆者は2～4行目で②をより重視しているから、結論として、

※【環境⇨人間世界】

となる。【環境⇨人間世界】であるから、4～6行目にあるように、

【環境】が我々に近いものであるとすれば ↓ 【人間（⇨我々）】にとって人間（⇨人間世界、社会）もまた近い

【環境】が我々に遠いものであるとすれば ↓ 【人間（⇨我々）】にとって人間（⇨人間世界、社会）もまた遠い

ということになる。まあこの部分は本文全体において、さして重要ではないので、要約からは外して良からう。

【小要約】

我々が生活している世界のことを環境と呼ぶ。環境とは自然環境も意味するが、人間社会をも意味する。むしろ我々がそこにあ
る世界は後者である。

第二段落

分析図は次の通り。

(図2)

人間と環境とは、 β 人間は α 環境から働きかけられ逆に α 人間が β 環境に働きかけるという関係に立っている。(我々は我々の住む土地、そこに分布された動植物、太陽、水、空気等から絶えず影響される。人間は環境から作られるのである。他方我々はその土地を耕し、その植物を栽培し、動物を飼育し、あるいは河に堤防を築き、山にトンネルを通ずる。人間が環境を作るのである。) すなわち人間と環境とは、 β 人間は α 環境から作られ逆に α 人間が β 環境を作るという関係に立っている。この関係は人間と自然との間にばかりでなく、人間と社会との間にも同様に存在している。 β 社会は α 我々に働きかけて我々を変化するとともに α 我々は β 社会に働きかけて社会を変化する。人間は社会から作られ逆に人間が社会を作るのである。

ここは簡単だ。ひたすら

α ∴人間↓環境 (人間が環境に働きかける)

β ∴環境↓人間 (環境が人間に働きかける)

をリピートしているだけ。後半は「環境」が「社会」に置き換わっている。1〜4行目の()部分は【具体例】。

【具体例】の扱いについて少し触れておこう。

【具体例】というのは、要するに【筆者の主張】を「分かりやすくリピートしたもの」である。入試現代文で扱われる文章では、筆者が自分の主張を抽象的に小難しく書く傾向がある。本人もそれは十分自覚していて、だからこそ具体例でもって咀嚼して読者に意を伝えようとするわけだ。

従って具体例を要約に盛り込むなど、愚の骨頂である。ごく一部の例外を除いて具体例は真っ先に切り捨てるべきだ。

【小要約】
人間と環境は相互に働きかけ、人間と社会もまた相互に働きかける。

第三段落

人間と環境が相互に働きかけると言うことは、

Y : 人間 ↓ 環境 ↓ 人間

という循環が起こるとのことだ。これについて述べているのが第三段落。このYの形成作用のことを「自律的」(8行目)、「独立性」(9行目)と言っている。

(図3)

人間は環境を形成することによって自己を形成してゆく、——これが我々の生活の根本的な形式である。我々の行為はすべて形成作用の意味をもっている。形成するとは物を作ることであり、物を作るとは物に形を与えること、その形を変えて新しい形のものにすることである。人間のあらゆる行為が形成的であるというのみではない、人間は環境から作られるという場合、^β自然の作用も、社会の作用も、形成的であるといわねばならぬ。もとより我々は単に環境から作用されるのではない。逆に我々は環境に作用するのである。環境が我々に働きかけるのは我々が環境に働きかけるのによるということもできる。^Y自己はどこまでも自己から自己を形成してゆくのであって、そうでなければ自己はない。しかし^β自己は環境において形成されるのである。生命とは自己の周囲との関係を育てあげる力である。一方^βどこまでも環境から限定されながら同時に他方^Yどこまでも自己が自己を限定するというすなわち「自律的である」というところに生命はある。「生あるものは^β外的環境の極めて多様な条件に自己を適応させ、しかも一定の獲得された^Y決定的な「独立性」を失わないという天賦を有する」とゲーテも書いている。我々は^β環境から作用され(逆に)^a環境に作用する、^Y環境に働きかけることは同時に自己に働きかけることであり、環境を形成してゆくことによって自己は形成される。環境の形成を離れて自己の形成を考えることはできぬ。

【小要約】

人間は環境に作用し、環境は人間に作用する。従って環境に働きかけることは同時に自己に働きかけることであり、そうすることで人間は自己を形成し、自律的な存在となる。

第四段落

(図4)

人間は **現実的存在** であるというが、現実的なものとは^①、そこにあるものである。そこにあるとは^① **世界** においてあるということであり、世界はさしあたり **環境** を意味している。(しかし)次に現実的なものとは^② **働く** ものでなければならぬ。働かないものは現実性があるとはいわれず、ただ可能性にあるといわれるのである。働くということは^② **関係に立つ** ということである。現実的なものはすぐれた意味においてある、といわれるのであるが、「ある」とは、ロツツエがいったように「**関係に立つ**」ということであり、**関係に立つ** ということは働くということである。あるとは知覚されることであると考えるとすれば、知覚されるということもまたかような関係の一つに過ぎない。しかるに物と物とが現実的に^② **関係する** ためには^① 一つの場所になければならぬ。**人間** は^① **世界** の中において、そこにある他の無数の多くのものと^② **関係に立つ** ている。

現実的存在 ↓ ①そこ (≡世界・環境) にあるもの

②働くもの・関係に立つもの

∴人間 (現実的存在) は世界 (環境) の中に^① **存在し**、そこにある他の無数の多くのものと^② **関係性** を持つ。

【小要約】

現実的存在とは世界にあるものであり、関係に立つものである。従って、現実的存在である人間は環境の中にあつて、そこにある他の無数のものと関係性を持つ。

第五段落

ど真ん中に出てくる逆接が大きな分水嶺になっている。

〔図5〕

人間と環境の関係は普通に主観と客観の関係と呼ばれ、私は主観であつて、環境は客観である。主観とは作用するもの、客観とはこれに対してあるものすなわち対象を意味する。主観と客観は、主観なくして客観なく、客観なくして主観なく、相互に予想し合い、相関的であるといわれている。《しかしながら》両者の関係をただ相関的であるというのは不十分である。私自身は私にとつてどこまでも環境とは考えられぬもの、反対に私にとつて環境であるものはどこまでも私自身とは考えられぬものである。客観からは主観は出てこないし、主観からは客観は出てこない、両者はどこまでも対立的である。

主観（人間・私）と客観（環境）は作用するものとされるもの ↓ 相関的

《しかしながら》

主観からは客観は出てこない・客観からは主観は出てこない ↓ 両者は全く別物・対立的

【小要約】

主観と客観は作用を通じて相関的であるが、しかしながら全く別物であり、その意味で対立的でもある。

さて、以上で小要約の抽出は完了だ。しかしながら、忘れてはならない。「問い」にあるように、我々解答者は「人間と環境の関係」を多少ヒイキシなければならぬのだった。その点を、小要約を再掲して確認してみよう。

第一段落…我々が生活している世界のことを「環境」と呼ぶ。「環境」とは自然環境も意味するが、「人間」社会をも意味する。むしろ我々がそこにある世界は後者である。(67字)

第二段落…「人間」と「環境」は相互に働きかけ、人間と社会もまた相互に働きかける。(31字)

第三段落…「人間」は「環境」に作用し、「環境」は「人間」に作用する。従って「環境」に働きかけることは同時に自己に働きかけることであり、そうすることで「人間」は自己を形成し、自律的な存在となる。(79字)

第四段落…現実的存在とは世界にあるものであり、関係に立つものである。従って、現実的存在である「人間」は「環境」の中であって、そこにある他の無数のものと関係性を持つ。(73字)

第五段落…主観（「人間」）と客観（「環境」）は作用を通じて相関的であるが、しかしながら全く別物であり、その意味で対立的でもある。(55字)

全ての小要約が「人間と環境の関係」に触れていることが分かるだろう。よって条件はクリア。あとは小要約を一つに統合して編集、そして重複内容をカットするなど字数調整を施して、解答を作成のこと。

L3T/L3TK/L3TF

難関国公立大言語／難関大言語T

京大言語／難関大言語T（京大）

一橋大言語／難関大言語T（一橋大）



Z-KAI

会員番号

氏名

不許複製